

環境保全と再資源化への提言誌

月刊廃棄物

Monthly the Waste Vol.50 No.635

since 1975

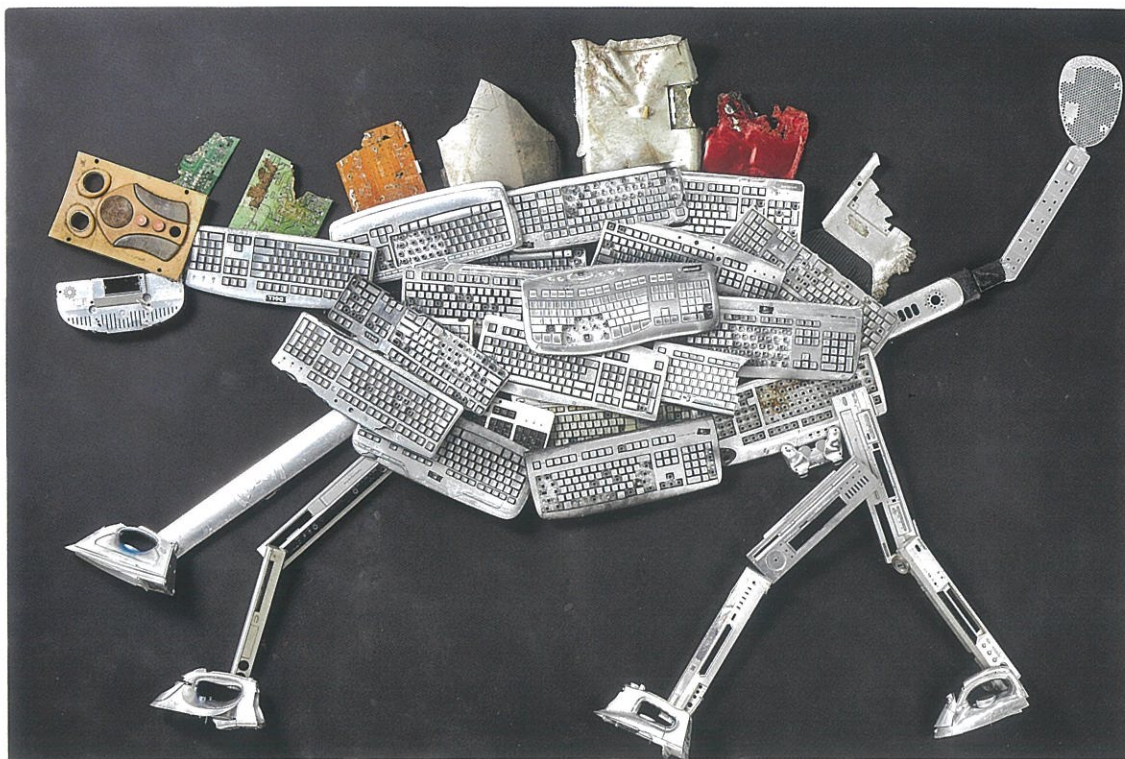
■特集

分別区分の組み方

■連載 廃棄物・資源循環分野の2050を考える

■連載 芝田麻里のごみエッセイ

■シリーズ 自治体Today





合同研修会を東京で開催 ―「人材の定着」をテーマに意見交換も―

東京廃棄物事業協同組合 青年部 / 大阪市一般廃棄物適正処理協会 青年部

DATA	
東京廃棄物事業協同組合 青年部	
部長	坂越佑二郎
部員数	39人
大阪市一般廃棄物適正処理協会 青年部	
部長	川村豊
部員数	一般28人、OB8人

東京廃棄物事業協同組合（以下、東廃協）と大阪市一般廃棄物適正処理協会（以下、一廃協）の両青年部は昨年11月17日、コロナ禍を経て5年ぶりとなる合同研修会を東京で開催した。当日は、東廃協青年部からは15人、一廃協青年部からは13人がそれぞれ参加。施設見学会や意見交換会を通じて、交流を深めた。両青年部の部長ら参加者に後日取材した。

最新のリサイクル工場見学とDX化など取り組みを視察

両青年部による最初の合同研修会は、2017年度に東京で開かれ、大田区の城南島で稼働する大型食品リサイクル施設の視察と、一般廃棄物許可業者を取り巻くそれぞれの地域事情や課題について意見を交わすところから両者の交流が始まった。

続く2018年度に大阪で開かれた合同研修会では、意見交換会とともに、一廃協の青年部が社会貢献の一環として毎年実施している献血活動を、東廃協の青年部がいつしよに体験して交流を深め、その後、コロナ禍に入ってからオンラインで交流を続けてきた。東廃協青年部では、大阪での社会貢献活動を参考に、東廃協事務局近くの早稲田通りで、地域住民や都と協力した歩道清掃や植樹活動のプログラムに参加するようになったという。

実地で久しぶりの開催となった今回の合同研修会では、午前中に足立区内で（株）首都圏環境美化センターが運営するリサイクル施設の見学、午後は同区内にある（株）利根川産業で業務のDX化など社内取り組み事例の紹介、その後、会場を秋葉原に移しての意見交換会という流れでプロ

ラムが組まれた。

首都圏環境美化センターの工場見学では、①光学式選別機を使った事業系廃プラスチックの選別施設、②オフィス古紙類の選別・圧縮施設、③混合の飲料容器を磁選機や光学式選別機を使って缶・びん・PETに選別する施設――の3つの工場を見学。利根川産業では、運転日報のタブレット端末化など業務負担軽減のために進めているDX化や、労務管理・事故防止活動の取り組み、SNSを利用した社員獲得のための広報活動について同社から説明を受けた。

地域事情の違いが浮き彫り

一廃協青年部部長の川村豊氏（株）ジオメイク）は、「東京では車両台数が100台以上、社員も100人を超えるなど大規模な許可業者も少

人件費や燃料費などのコストが上昇している分、それなりの価値を提供して、相応の対価を得る方向にいかなければ業界として成り立たなくなると語る。

「人材」をテーマに意見交換

意見交換会では、この業界に共通の課題である「人材をいかに定着させるか」をテーマに、参加者がそれぞれのスマートフォンから回答を送信し、結果を全員がリアルタイムで共有できるサービスを利用しながら「人材についての各社の取組」について情報を共有していった。

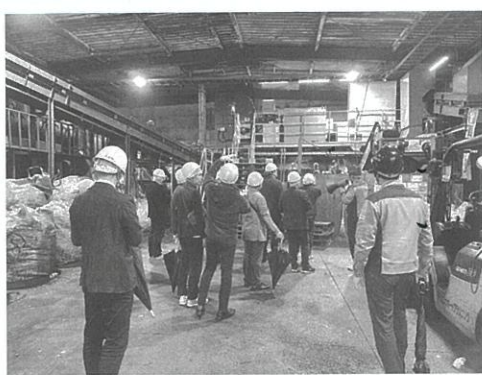
ここであがった人材定着の方法はさまざまだ。「社員の誕生日にプレゼントをしている」、「社員の自宅用車のガソリン代や車検代を出している」、「社員にうな重弁当やクリスマスケーキをプレゼントしている」、「毎年新米を送る」といったものから、「地方出身者への住まい探しを手伝っている」、「個別面談を実施し社員の相談を定期的にするようにしている」、「よいところを褒める」、「怒らない」といった回答まで多岐にわたった。

一廃協の川村青年部長は、意見交

者からは「東京ならではの驚きを持って受け止められることも少ない。昨年10月には、東京23区で1kg当たり40円に設定されていた収集運搬費を含めた事業系一般廃棄物の処理手数料が46円に改定され、顧客との料金改定に「満額回答を獲得するチャンス」として臨むことを東廃協が組合員各社に呼びかけたことも、東京区部の事情を如実に物語っている。

は運転日報をDX化する必要性がわからなかったが、東京では従量制を導入している業者も多いと聞いて納得した。ドライバーが重量を毎回計量して、その数字を事務担当に引き継がなければならぬとなると、その部分の作業が業務を圧迫して、2024年問題のクリアが難しくなる面もあるのでは」と語った。

また、中小零細で商圏の限られた許可業者が、顧客から値下げの要望があれば飲まざるを得ないケースが実態としてある中で、東京23区の許可業者が、処理料金の折り合いがつかない排出事業者の仕事を断るケースがある点も、他県の業



工場見学の様子



合同研修会には両青年部から計28人が参加した

換会を振り返り、「さまざまな業種の選別機がある中で、この業界を選んで入ってくれた社員に、入ってよかったという気持ちにいかになってもらえるかが重要。普段は同業者間でそういう話しをする機会はありませんが、今回は各社が内部事情を含めてカミングアウトして実りある意見交換ができた」と語る。

竹田氏は、具体的な対応として「最近給料さえよければよいというのではなく、どれだけ休みを多く取れるかなど、働き方の部分を重視する傾向があり、福利厚生の部分でいかに工夫していくかがこれからの決め手になる。社員数の少ない中小零細だからこそできるきめ細かな対応もあると思うので、そこを工夫していきたい」という。

東廃協青年部部長の坂越佑二郎氏（有坂越商事）は、「自分の時間を大切にしたいなど、昔の体育会系とは異なる新しい感性を持った若い人が多くなってきてきた中で、そうした層のスタッフにもしつかり働いて、定着してもらうための体制づくりを各社が工夫していく必要がある。経営者がそこに目を向けていかなくては、若いスタッフは定着していかない」と語った。W（本誌・新倉）